

教 仁 名 聞

第 174 号 毎月発行
(発行日) 2025 年 3 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

花に聞く

佐々木蓮磨

すべて人間は謙虚な気持ちになると、あらゆるものから教えが聞けるようになるものです。ところが現代の人たちは、他を批判することは上手ですが、他の教えを聞くことは下手なように思われます。これは人間として不幸なことではないでしょうか。謙虚な気持ちで道を求め、法を聞こうとする人は、すべてのものから教えが聞けるようになるものです。徳川末期における大谷派の名師香樹院は山吹の花を愛し、その花から教えを聞いて行かれたといわれています。

香樹院が山吹の花を愛されたのは、単に山吹の花が美しいからというのではなく、いかに美しい花が数多く咲いていても、一つの実すらもつかぬことを、わが身に引き寄せて喜ばれたと

聞いております。すなわち自分はいかに法を聞き、念仏しても、仏種は絶対にならないことを山吹の花が知らせてくれると喜んで喜ばれたのであります。まことに尊いお気持ちであると思えます。

また一蓮院は、とくに蓮の花を愛されて、みずから一蓮院と称せられたということでありますが、これも単に蓮花の美を愛されたのみではなく、汚い泥水の中から生じて、その濁りに染まないう清浄な花が咲くのを、他力の信心に寄せて、お悦びになつたようであります。

香樹院師は凡夫の自性には仏になるタネのないことを山吹の花から聞いて行かれ、一蓮院師は、その仏になれない凡夫の自性に、如来からお与えの仏だねが生ずることを蓮の花から聞いて行かれたようであります。

私の友人に蘭を愛する人がおりましたが、この友に蘭の中でも花香のあるものを喜び、とくに支那の春蘭を愛しておりました。それは、支那春蘭の花は目につかぬほどに謙虚で、しかも、その香りの床しさが、なんとも言えないところは、あたかも一隅を照らす聖りの徳にも比すべきものがあるといふのであります。

この見方も非常に尊いように思います。いかに支那春蘭はその姿と香りといふ、まことに謙虚で、しかも高尚なところがあります。古来、植物の中から

人間の君子にも比すべきものを四つあげておきますが、その中に梅と蘭が入っています。どちらも早春に花が咲いてその花の色といい、姿といい、清楚で高雅な点において、植物中の双璧であろうと思えます。なんといっても、木の花では梅であり、草の花では蘭であります。

支那の孔子が「王者の香り」と讃えたのは、この支那春蘭の香りだと聞いております。また雲華上人にしても鉄翁和尚にしても蘭花を愛して、書で蘭花を讃え絵で蘭花を写したと聞いておりますが、いずれも誦花に教えを聞いて行かれたのではなかつたかと思えます。

(了)

《念佛寺永代経岸法要》

四月二十二日 (火)

午前 10 時始

午後 2 時始

法話 住職

清沢満之先生に学ぶ ①

を求めて、神
仏や観音様や
お地藏さんな
どに「災難不
幸が来ません

よう」と願ったり、お内
仏（仏壇）にお願ひ事をし
たりする場合がありますが、
これはいつまでたっても本
当の安心をもたらさないと
はいうまでもありません。
このような中で、真剣に不
安を克服しようと思自覚的に
求める人があります。その
代表的なお方が釈尊でした。

代の私たちに大きな意味
をもっています。そこで何
回かにわたって清沢師の教
えから学びたいと思います。
今回は一人一人の人生に
おいて、最も基本的な問題
についての清沢師の言葉を
ともに考えたいと思います。

人は意識するとしないと
にかかわらず、自分の人生
に安心をしたい、安らかで
ありたいという願うもので
す。逆に言えばそれほど人
生は不安だらけです。生計
の不安、健康不安、人間関
係での不安、政治上の不安、
ウイルスや地震や洪水、放
射能汚染など自然環境の悪
化の不安、戦争や暴力の不
安、そして死後の不安、最
後にとうか一番の元に死
の不安など、不安に満ちて
いるのがこの世の人生のあ
りさまです。

では釈尊は、何を悟られ
たのか。それは悟られた時
の言葉に「私は不死の門を
得た」「不死を得た」とい
われています。不死とは不
死のいのち、いわば死なな
いのち、すなわち無量の
いのち、それをインド語（サ
ンスクリット語）で言えば、
アマターユスといい、いわ
ゆる阿弥陀仏のことです。
釈尊は阿弥陀仏にであわれ、
阿弥陀仏を我が真実のいの
ち、本来の真実の自己であ
ると自覚されました。

ここにいいのちですが、
はかりないいのちに結びつ
けられているいのちとして
刻々に動きつつあるいのち。
それが現実の自己であり、
阿弥陀仏に攝取されている
私であるという自覚です。
すべてのもの、すべての
この世の現象は、変化し続
け、流動しつとあり、移り
変わっていきますが、今こ
こにはたらいっているはかり
ないいのちは私と離れない
のです。この私をいつでも
今ここで捉め取っている阿
弥陀のいのちこそ、私の動
かないよりどころであり支
えなのです。

『吾人の世にあるや、
必ず一つの立脚地なかる
べからず。もしこれなく
して世に処し、事をなさ
んとするは、あたかも浮
雲の上に立ちて技芸を演
ぜんとするものの如く、
その転覆をまぬがるるこ
とあたわざるは言を待た
ざるなり。』

しからば吾人はいかに
して処世の完全なる立脚
地を獲得すべきや。けだ
し絶対無限者によるの外
ある能わざるべし』

（清沢満之の言葉）

*

これは清沢満之師の言葉
です。清沢師は明治時代に
活躍された真宗大谷派の僧
侶で、近代日本の宗教者・
思想家として極めて評価の
高い仏者です。師はわずか
四一歳で病没しましたが、
師が残された真宗思想は現

こうした不安から逃れよ
うと、その場かぎりの慰め

しかし、同時に現実に人
として世間を生きる（私）
としては阿弥陀仏のいのち
においてある極く小さな自
己であると。
今ここにある一つの物で
あるとしかいえない小さな
現実の私は阿弥陀仏のはか
りないいのちと一体のいの
ちで、阿弥陀仏のいのちの
他にあるいのちではありま
せん。私は小さな一つの物
に過ぎないいのちとして今

清沢師が「吾人の世にあ
るや、必ず一つの立脚地な
かるべからず」といわれる
自分の人生の確かな立脚地、
それがなければ、浮雲の上
で技芸をしているように実
に不安だらけで、転覆をま
ぬがれません。どつちへど
うころんでも私をささえて
いる立脚地がなければ、す
べて不安定です。財産も健
康も人間関係も政治も世界
情勢も、自然環境も揺れ動

を求めて、神
仏や観音様や
お地藏さんな
どに「災難不
幸が来ません

き通しです。

こうした不安定な人生の状況の中で「しからば吾人はいかにして処世の完全なる立脚地を獲得すべきや。けだし絶対無限者によるの外あるあたわざるべし」で、いつでも今まここにともにいて抱いていてくださっている絶対無限者である阿弥陀仏（無量寿）、これが私の動かぬ立脚地なのです。

その阿弥陀仏が私たちとともにいて、私を引き受けてくださっていること、受容してくださっていること、私がどういう状態になろうとともについてくださっている。これは万人にすでに無償に与えられているのです。その人が善人か悪人か有能か無能か賢者か愚者か男か女かなど一切の肉体的な資質に関係なく、ただ単純にともに離れなくいてくださっている。そのことを知らせる言葉が南無阿弥陀仏です。この南無阿弥陀仏は阿弥陀仏が、阿弥陀仏の方から私たちに慈悲のお心でもってほたらきかけ、喚びか

けてくださっている。このことを説かれたのが『仏説無量寿経』です。この釈尊のお言葉を信じてお念仏を申していくなら、お念仏のお声そのまま阿弥陀仏の喚びかけであること、そして阿弥陀仏が私にいつもついていてくださっていることを知らされるのです。

もちろん知らされたからといって私たちの不安がすべてなくなるというわけではありません。長い間私たちは、我が身に執着し続けてきたのでその癖が深く身に染みついていてのですから不安は大なり小なりしばしば起こります。しかし不安煩惱が起こることを縁としてお念仏を申しお念仏を聞く、そこに「汝とともにいる、汝を抱いている、ここにいる」との阿弥陀仏の仰せを聞き、阿弥陀仏が抱いていてくださることを知る。こうして不安だらけの人生において、その不安の中でそのつどほっと息をつき、安らぎを与えてくださるのである。（了）

真宗の修行

B 「真宗では他宗派のような修行はないのですか」

A 「自力の修行はないですが、真宗（他力）の修行はあります。修行とは行を修めることです」

B 「真宗の修行は自力の修行とどう違うのですか」

A 「自力の修行は自分の修行によって悟りを開こうとする修行ですが、真宗の修行は阿弥陀仏の救いのはたらきを聞かせていただく修行です」

B 「真宗の修行はどのようなものですか」

A 「五正しやうぎやう行といわれています。これを真宗門徒は日課のように行うことを勧められるのです」

B 「五正行とは」

A 「誦誦どくじゆ正行・観察かんざつ正行・礼拝正行・称名正行・讚嘆さんだん供養正行の五つで、行とは行うこと、修行ですね」

B 「この五つの行を日頃行うことが勧められているのです

ね。では誦誦行とは」

A 「浄土の経典（大経・観経・阿弥陀経）や正信偈などの偈文を声を出して読むことです。一般には正信偈がよく読まれます」

B 「観察行とは」

A 「これは阿弥陀仏の有難いはたらきを聞いて自分の上に味わうことです」

B 「それはどうすることですか」

A 「家庭でしたら、御文や歎異抄など仏様のお言葉を読んで、阿弥陀仏の救いのはたらきを知ることです」

B 「礼拝行とは」

A 「阿弥陀仏に手を合わせて拝むことです」

B 「称名行とは」

A 「南無阿弥陀仏の名号を称え、耳に聞くことです」

B 「讚嘆供養とは」

A 「阿弥陀仏を讃えるためにおかざりなどをするということです。掃除をし花をかざり灯明をともし線香を焚きお仏飯や水を

備えたりして阿弥陀仏のお徳の尊さを讃えるのです」

B 「これを毎日のようにするのですか」

A 「はい、なにもむつかしいことではありません。お内仏でお勤めをするとこの五正行は自然に行われます。お内仏を掃除し、ローソクに明かりをつけ、手を合わせて合掌し、お念仏を申し、正信偈の勤行をして、後で御文を読むというこの五正行を真宗門徒は連綿として行ってきました」

B 「こういう五正行を毎日するのが真宗門徒のたしなみなのですか」

A 「ええ、そのためにお内仏（お仏壇）があるのです」

B 「真宗は他力だからなにもしなくていい、というのではないのですか」

A 「もちろんです。教も聞かず、お念仏も称えず、寺にも参らず、お聖教も読まないで救われたということは聞いたことがありません。こうした五正行は勤行であって、勤めて行うものです。勤めるというのは努力して励むという意味があります」

B 「お仏壇が無い人はどうし

たらいいのですか」

A 「お仏壇というたいそうに考えますが、ご本尊（阿弥陀仏の掛け軸）をかけてその前にお花とローソク立てと香炉があればお仏壇です。タンスの上でも結構です。あとはお鈴と勤行本それにお文や歎異抄などのお聖教があれば十分です」

B 「ではこの五正行の中で一番大事なのはどれですか」

A 「それは称名念仏です。お念仏を称え聞くことです。これが中心です。この称名行を正定業といって、この行が浄土に生まれる行、いわば阿弥陀仏の救いの行です」

B 「なぜ称名が救いの行いですか」

A 「阿弥陀仏は（南無阿弥陀仏を十声なりとも一声なりとも称えるばかりで、汝の罪業はいかほど深くてもそれを全て引き受けて浄土に生まれさせる）との誓約のとおりにはたらいいてくださっているからです」

B 「称名を称え聞くことはそこに救いを知るからなのですね」

A 「ええ、念仏を称える一声

が耳に聞こえます。それは（一

声なりとも称えるばかりで引き受ける、助ける）という阿弥陀仏の大悲の仰せです。ですの南無阿弥陀仏と聞かされる、（ああこんな私をこの南無阿弥陀仏様が助けてくださる）と聞かせていただくのです。このように素直に聞き受けたのを信心と申しまして、これが浄土に生まれる正因といわれるのです。正定業の念仏を信じると、お念仏は、私を担ってくださいている阿弥陀仏のおはたきであることが知られるのです。それゆえお念仏を、正しく浄土に生まれることの定まる業（おこない）といわれるのです。この称名行は仏前だけでなく全生活の中で行うことのできる行です」

B 「では称名念仏とあとの四つの行とはどういう関係になりますか」

A 「救われるのはお念仏一つをいただくばかりですが、お念仏ははかりないのちの領域（無量寿国）に至らしめるはたらきです。このお念仏を称える生活が始まりますと、あとの四つの正行が自然に伴

つてきます。それゆえ念仏以外の四つの正行のことを助業と申します」

は」

A 「それは、念仏を称える生活はおのずと阿弥陀仏を拝むようになります。これが礼拝行です。そしてお念仏のいわれが説かれているお経や正信偈などの偈文を口に出して誦むようになります。これが誦誦行です。そして阿弥陀仏の大悲の心を味わいたくなり、聞法したくなります。それが観察行です。そしてご本尊の阿弥陀仏を敬う気持ちから、花を供えたり灯明を灯したり、お香を焚いたりします。念仏生活に伴ってこのような行い（四正行）がおのずからなされるようになります」

B 「わかりました。こういう念仏生活をするためにお仏壇があるのですね」

A 「ええそうです。最近はお仏壇を閉めたり持たない方が多くなりましたが、もったいないですね。お仏壇は家の中にある小さなお寺と同じ意味です」

（了）

【お便り】

（先月、台湾の洪様と千田様から次のようなメールをいただきました）

（洪様より）

【台湾の浄土真宗の信者でございます。日本語が不得手なため、本書簡はCHAT GPTを用いて翻訳いたしました。

貴寺の「信心の言葉」に収められている多くの高僧、妙好人、善知識の御文を拝読し、私たちはすでにいくつかの書を翻訳いたしました。浄土真宗がまだ根付いていない台湾の地において、これらの御文はまさに法雨のごとく、私たちの心を潤してくださいとおります。貴寺のご尽力に心より感謝申し上げます。

十数年前、貴寺を訪れるご縁に恵まれましたが、またいつの日か再びお参りできるとを願っております。貴寺のウェブサイトという宝庫から、私たちは計り知れないほどの法の滋養をいただいております。改めて、そのお志に深く感謝申し上げますとともに、真宗のみ教えが台湾においてさらに広まることを心から願

っております。

翻訳技術の向上のおかげで、このように書簡をしたため、貴寺と交流し、感謝の気持ちをお伝えすることが叶いましたことも、まことにありがたく存じます。末永く法灯が輝き続けることを願い、ここに御礼申し上げます】

*

（千田様より）

【先週のことになりますが、思いがけず木村無相師の文章を拝読しました。それは私今まで抱いていた疑問を受け止め、答えようとしてくださる言葉でした。初めはネットに公開されている『慈光』誌の文章でありましたが、さらに師の著されたものを読みたいと思ひまして、現在刊行されている『念佛詩抄』と先生の『お念仏のお便り』を今週入手し、現在拝読しています。そして改めてその内容に感銘を受けています。今まで文章を読んでこれほど心が動かされたことはありませんでした。まずは、このような御本を刊行してくださったことに深く感謝いたします】

（了）